

令和4年度 アイランドキャンパス事業

## 交流と学びの南種子探究ロゲイニング

### 報告書

鹿児島大学教育学部 藤田勉・佐藤宏之

## 目次

1. はじめに	
1) 本事業の目的	1
2) 実施場所	1
3) 実施時期	1
4) 参加者	1
2. 活動報告	
1) 事業内容	1
2) 前日リハーサル	2
3) 下中郷土カルタ	2
4) 交流ロゲイニング	3
5) 地元への還元（防災ロゲイニング）	4
3. 総括	
1) 教育活動としての成果（学生のレポートより）	5
2) おわりに	10

## 1. はじめに

### 1) 本事業の目的

本事業の目的は、鹿児島大学の学生が南種子町立花峰小学校の児童及び保護者との交流を深めるために、下中郷土カルタ及び交流ロゲイニングを実施すること、また、地元への還元として防災ロゲイニングを実施することであった。

本事業に参加した学生たちは、教員養成学部の学生であり、鹿児島県の教員を目指している。鹿児島県の教員の異動は県全域であり、花峰小学校のように離島の小規模校に着任する可能性もあるため、学生たちにとって本事業は将来を考える貴重な経験になると考えられた。また、本事業では、児童の保護者との交流もあるため、大学の教育実習とは異なる教育効果が期待された。

### 2) 実施場所

南種子町立花峰小学校及び周辺集落

### 3) 実施時期

令和4年11月4日（金）～11月5日（土）

### 4) 参加者

鹿児島大学学生7名及び教員2名、花峰小学校の児童、保護者、教職員、南種子町役場職員

## 2. 活動報告

### 1) 事業内容

本事業ではロゲイニングと呼ばれるナビゲーションスポーツを応用した活動を実施した。ロゲイニングは、複数名でチームを組み、クロスカントリーコース内に指定されたエリアを地図とコンパスを用いて各ポイントを探査し、得点を競うスポーツである。オリエンテーリングと類似しているが、チームを組んで競技する等の違いがある。

本事業で実施した活動は、ロゲイニングの枠組みを応用して考案した探索型の活動であった（詳しくは、後述の交流ロゲイニングや防災ロゲイニングで解説）。厳密には、(社)日本ロゲイニング協会や日本フォトリゲイニング協会で定義されるロゲイニングと内容は異なる。本事業で実施する活動にはロゲイニングのような競技性はない。また、地図上にポイントを記さずに画像の情報を手掛かりとして探索するため、コンパスを用いることはない。そして、ポイントの情報をチーム間で共有する学習活動が組み込まれている。しかしながら、活動を計画した当初は、ロゲイニングをベースとして活動内容を考案していたこと、また、なじみのある名称が他に見つからないことから、本事業では交流ロゲイニング及び防災ロゲイニングという名称とした。

## 2) 前日リハーサル

11月4日(金), イベント前日に種子島宇宙センターの駐車場周辺広場にて, 打ち合わせを兼ねたロゲイングのリハーサルを行った. ここでのロゲイングは制限時間を10分とした. 予めタブレットに保存されてあるポイント14か所の画像と同じ写真を制限時間内にできるだけ多くタブレットのカメラ機能を使って撮影し, 終了時にビンゴ表と撮影した画像から得点を算出し, 順位を決定する方法とした. エリアの範囲やポイントの数等, おおむね計画通りであったが, 制限時間については再度検討することとした.

## 3) 下中郷土カルタ

11月5日(土), 午前9時からイベントを開始した. はじまりの挨拶及び大学生の自己紹介の後, 大学生と児童で構成される5チームを編成した. チーム編成後, 大学生と子どもたちの対戦による下中郷土カルタが実施された. 子どもたちの元気の良さから, 開始直後から盛り上がり, 大学生も元気づけられたようであった. 加えて, 何も見ずにカルタを読み上げて下さった先生の姿に学生たちは驚いていた. 結果は子どもたちの勝利であった. カルタの最後は, 子どもたち全員による下中郷土カルタの暗誦が披露された(図1～図4).



図1. 花峰小児童 vs 鹿大生の下中郷土カルタ!



図2. 子どもたちが優勢です!



図3. 大学生も頑張りましたが, . . .



図4. それでも子どもたちは強かった!

#### 4) 交流ロゲイニング

子どもたちによる下中郷土カルタの暗誦の後、場所を校庭に移し、交流ロゲイニングを実施した。カルタでは大学生と子どもたちの対戦であったが、交流ロゲイニングでは、大学生と子どもたちのチームを構成し、協力し合って課題に取り組んだ。本事業のイベントを計画していた当初は、子どもたちの人見知りを予想し、カルタで敵対した相手とチームを組んで協力し合うという社会心理の仕組みを取り入れたが、アイスブレイクさえも必要ないほど、子どもたちは大学生に物怖じせず且つ友好的であった。

本来のロゲイニングは、地図やコンパスが使われ、制限時間も数時間にわたる競技であるが、本事業では大学生と子どもたちの交流を意図して行われるため、独自のルールと課題を設定した。交流ロゲイニングのルールとして、地図やコンパスは使用せず、制限時間を5分とした。課題は、予めタブレットに保存されてある花峰小学校敷地内の14か所の画像の情報を手掛かりとして、大学生は子どもたちから教えてもらいながら、そのポイントの場所へ移動し、画像と同じ写真をタブレットのカメラ機能を使って撮影するというものであった。また、ゲーム性を持たせるため、各画像に割り当てられた得点に加えて、ビンゴ表を作成し、撮影した画像の得点とビンゴが完成した数で得点の差が出るようにした。ビンゴによる加点があることにより、14か所のポイントをどの順番で撮影していくかという作戦を立てることが必要とされた(図5～図8)。



図5. 交流ロゲイニングの説明



図6. ポイントで写真撮影



図7. ビンゴで得点を計算



図8. 各チームの得点を発表



## 5) 地元への還元 (防災ロゲイニング)

交流ロゲイニング終了後、地元への還元としてのワークショップとして防災ロゲイニングを実施した。防災ロゲイニングも交流ロゲイニングと同様のルールと課題であるが、予めタブレットに保存されてある13か所のポイントの画像は防災情報となる。また、学習活動であるため、開始前には防災ロゲイニングの意図等の説明をした(別途資料を添付)。そして、学校の敷地から外へ出るため、走らずに必ず歩くこと等、安全に実施するように注意を呼び掛けた。制限時間は30分とした。ロゲイニング終了後は、体育館に集合し、撮影した画像を見ながら、本日のまとめとして、危険を知らせてくれるもの、防火や防災に関するもの、災害後に必要なもの等の講義を実施した(図11~図18)。



図9. つぎは、防災ロゲイニング



図10. タブレットを使って説明



図11. どのコースを進むか作戦会議



図12. 防災ロゲイニングスタート!



図13. 交通ルールもしっかり守ります。



図14. このあたりにあるのかな?





図15. 撮影した写真は地図上だと、どこかな？



図16. 撮影した防災情報の意味を考えてみよう！



※「たて・よこ・ななめ」がそろったらピンゴ

④	⑧	①
⑩	②	⑫
⑪	③	⑥

図17. 防災ロゲイニングのエリアとピンゴ表

なぜ、それが地域の防災にとって重要なのか、グループの考えをまとめてみよう。

① 1点  
② 5点  
③ 10点  
④ 10点  
⑤ 10点  
⑥ 10点  
⑦ 5点  
⑧ 2点  
⑨ 1点  
⑩ 1点  
⑪ 2点  
⑫ 5点  
⑬ 5点

I. 危険を知らせてくれるもの  
③砂防指定地、④土石流危険渓流、⑤海拔11m、⑦海拔8m、⑫海拔4m、⑬海拔11m  
II. 防火や防災に関するもの  
①消防水利、②消火栓、⑥消火栓、⑨消火栓、⑩消防水利  
III. 災害後に必要なもの  
⑧避難所（一次）、⑪避難所（二次）

図18. Microsoft Whiteboardを使って防災情報の意味を集約

### 3. 総括

#### 1) 教育活動としての成果（学生のレポートより）

事業終了後、教育活動の成果の確認として、参加学生たちにレポートの作成を依頼した。レポートの内容は11月5日（土）、花峰小学校で実施したイベント（下中郷土カルタ、交流ロゲイニング、防災ロゲイニング）に参加して得た経験や学んだこととした。参加学生たちには、1,000～1,200字程度で作成するよう指示し、全てあるいは一部を報告書に掲載する旨を連絡した。以下、参加学生全員のレポートの内容である。まとめるほどの量はないため、全文を掲載する。

学生たちは、本イベントで実施した防災ロゲイニングの経験はない。花峰小学校のことや下中地区の情報については、学生たちよりも子どもたちの方が詳しいため、学生から子どもたちにたずねる様子も見られ、一緒に活動をして学びを得るには良い教材であった。仲良くなるためだけの交流ではなく、学習活動としての目標を達成するための交流ができたと考えている。

本事業の活動が大学の教育実習と大きく異なる点は、保護者と接する機会が得られたことである。教育実習では、授業の進め方や子どもたちとの接し方について学べるが、保護者と接する機会はない。本事業を通して、子どもたちのイベント等に保護者の協力が欠かせないことを感じたに違いない。

私は花峰小の子どもたちと交流をして、地域における学校が担う役割について学んだ。花峰小には、郷土かるたという南種子町の自然や文化などの豊かな資源をかるたにした遊びがある。この郷土かるたは、私たちのように鹿児島の本島や県外から来た人たちに対して、自分たちの地域を知ってほしい、好きになってほしいという思いが込められていた。実際、私は郷土かるたを通して南種子町のことを詳しく知ることができ、豊かな資源を有するこの地域に興味を抱いた。なにより元気いっばいに紹介してくれた子どもたち自身が、南種子町のが大好きなのだということを感じた。かるたの制作については、児童たちが自らイラストを描き、さらに50音全てを暗記していると聞いた。かるたの内容をただ覚えるのではなく、地域の資源を学びながら作成したらしい。このことから、学校というのは、子どもたちが地域を愛好する心を育む場として位置づけられていることを学んだ。

また、防災ロゲイニングで学校周辺の防災設備や看板のポイントに向かう途中、ここには何がある、誰の家、というように教えてくれて、子どもが地域住民を巻き込んで人々の関係性を密にしているのだと感じた。防災訓練も然り、地域で催される行事はおおよそ学校でおこなわれるらしく、その影響もあって地域の中心は学校となっている。これは決して花峰小に限ったことではなく、各地域の学校においても避難場所となったり、スポーツの練習の場又は大会開催場所として提供されたりする。花峰小の周辺を歩いてみて、学校の役割とは、地域住民が交流できる場を提供することであると一層強く感じた。

続いて、花峰小の先生方に関して、役場の方や保護者と親しくお話をされており、学校を取り巻くあらゆる関係者との繋がりの重要性を学んだ。今回の事業が実現したのも、校長先生をはじめとする教員方が役場の方や保護者と連携し、協力してくださったおかげである。そこで私は、教員は学校内の人間関係だけでは不十分で、子どもたちが地域に密接した環境で生活ができるように、様々な方々と関わりをもつ必要があると思った。花峰小の先生方は下中地区住民に受け入れられ、とても親しまれている様子だったので、教員は、地域に目を向け、幅広い人間関係を築いていくことが大切であると考えた。

今回初めて少人数の学校を訪れて、地域における学校や教員の役割を学ぶことができた。教員は、地域貢献を念頭に置いて学校に携わるべきであると思う。子どもたちが地域のことを学ぶことにより、将来地元の地域活性化のために貢献したいという態度を促すことができれば、少子化や過疎化等の問題を解決できるかもしれない。私は花峰小に関わる方々と交流をし、学校と地域の関係性を学ぶことができたので、教員のあるべき姿について、これから考えを深めていきたい。



今回、私は初めて種子島を訪れ種子島の児童、及び保護者、教師との交流を行った。初めにカルタを行い交流ロゲイニング、防災ロゲイニングの順で行ったがカルタを行なう前から児童はとても明るく元気な様子で半日の活動全てを通して楽しんでくれている様子であり嬉しかった。私自身の実習の経験から、島に住む児童は心を開いてくれるまでに時間がかかると考えていたため前日からどのような接し方をするか、話題を提供するか考えていたが児童の方が多く話しかけてロゲイニングにも興味津々の様子だった。偏見までは行かないが、種子島に行くまではこのような思い込んだ考えもあったため、教師になる上で児童に対する勝手な思い込みをして指導にあたることは今後しないようにしなければならないと感じた。

また、ロゲイニングに関しては3年生の女の子と4年生の男の子、その保護者2名で行った。実習を通して、児童と関わることはとても多くなったが保護者と関わることは初めての経験であったためとても貴重な時間だったと思う。2組のうち、1組の家族は最近留学で種子島に引越してきたとのことで防災ロゲイニングの際に場所の把握が出来ていないようであったが、もう1組の家族がそれを踏まえて時々分かりやすい説明を入れたり地域についての話をしたりしており保護者同士の交流の場としてもロゲイニングは有効であると感じた。そうした交流だけでなく、もちろん防災ロゲイニングでは街にある様々な防災に関するものについて「なぜここにこの看板があるのか」、「これはどういう時に使用できるのか」ということを考え、その結果、その土地の特徴や避難時に素早くその場所へ行くことのできるようになるための知識を得ることができていた。3、4年生では以前に消火栓やその他の防災機器に関する学習をしており、その復習も兼ねた活動ができたと考える。それが自分の生活する街のどこにあり、どのような使い方をすれば良いのか、実際にその場所に行き把握しなければ災害時に役立てることができない。学校の授業では社会の状況やさまざまな事実、歴史、今回のような防災について言葉を通して知ることが多いが実際にそれを見て何かを感じたり、学んだりすること。さらに、それに疑問を感じることでできる活動というのは中々ない。だからこそ、事実だけをただ知る授業は今生きている社会の現状や事実であり、生きていくうえで知るべきことであるのどこか現実味が無い気がする、深く知ろうとしないことがある。また、自分が関わっていることを確認して初めて、それが本当であると言うことに気づくことも多いと考える。今回の活動を通して、私が行う授業ではただ聴くだけの授業ではなく実際の活動を取り入れたより現実味のある深い学びが行えるようにしたい。

今回の花峰小学校での交流を通して、さまざまな経験をすることができた。私は9月に学校環境観察実習で奄美大島の小学校に実習に行った。初めての離島教育、また小規模の学校で過ごす体験をした。奄美の小学校の子どもたちは、日頃同じ人としか接する機会がないからか、初対面の私たちに人見知りをしている様子であった。しかし、花峰小学校の児童は、社交的で、大学生である我々にも積極的に関わってくれた。そのため、約3時間という短い時間の中で、子どもたちから花峰小学校のことや種子島のことについて多くのことを学ぶことができた。

まずは郷土かるた遊びを行った。郷土かるたは児童の手作りで、一つひとつの文章に合った絵が描かれていた。かるたが終わった後に絵を見せながら一つずつ紹介してくれ、素晴らしい発表を見せてもらった。このようなことは、大規模校ではなかなか行えることではなく、種子島の地域の特徴を活かした活動であると思った。離島は地域との結びつきが強く、学校全体で地域を大切にしていると同時に、地域も学校を大切にしていると感じた。

ロゲイニングの活動では、1年生と6年生の男子児童2人と活動した。最初の交流ロゲイニングで、児童はロゲイニングという活動を理解していた。その次に防災ロゲイニングを行った。大学生である我々は、地域のことについて知らないため、出発前にコントロールポイントの写真を児童に見せ、作戦を立てた。児童はすべての写真の場所を把握していた。特に1年生などの低学年は、回る順番など考えずに、分かりやすい場所や思いついた場所に飛びつくと思っていた。しかし、全くそのようなことはなかった。どの順で回れば効率よく回れるか、もれなく回れるかということを考えていた。大学生が何も言わなくても、2人の児童が話し合い、自分たちで考え、大学生をコントロールポイントまで連れて行ってくれた。このような様子を見て、児童には何もかも指示を出すのではなく、まずは自分たちで考えさせることが大切だと思った。また、児童の話し合いの様子から、ロゲイニングの目的の一つである、コミュニケーション能力の向上にもつながっていると実感することができた。ロゲイニングのようなゲーム性のある活動は、児童の興味を引きつけ、楽しく学びきっかけになると思った。

保護者の方々や子どもたちは、花峰小学校でそろえているTシャツを着ていた。このようなことも、普通の学校ではなかなか見られない。離島であるからこそ、また小規模校であるこそこの団結力や結束力を感じた。そこに、全く知らない土地から来た教師も交わらないといけな。そのため、教師は地域について学び、今のうちからこのような経験を多く積んでおくことが大切だと感じた。各地域にさまざまな特色があることを知るということだけでも、教師になるにあたって、大きな経験となり、貴重な経験をすることができた。

教員を目指す者として今回の花峰小での経験はとてつもない財産となった。私は、鹿児島県出身であるが、離島へ一度も訪れたことがなかった。「離島教育」「少人数教育」「複式学級」といったワードは講義や勉強をしていく中で数多く出てきていたが、小学校からずっと大規模校で過ごしてきた私にとってあまりピンとくるものではなかった。しかし、実際に南種子の花峰小での活動を通して強く実感することができた。

特に、子供たちとの距離感である。当初は、初めて会った子供たちと半日しか活動できないけれどもうまくやれるかという不安があった。しかし、実際に活動してみるとすぐに仲良くでき、違う班の子供たち全員とも打ち解けることができた。教育実習の時は、仲良くなるまでに1~2日はかかり、最終日まで話しかけてくれない子供だった。大規模校での教育実習などでは絶対のない光景であった。なぜこんなにも子供たちとすぐに距離を縮められたのか考えてみると、保護者の方々や先生方、地域の方々みんなが全員を育てていっているからではないかと私自身は感じた。

保護者の方々も自分の子供だけでなく声をかけたり、時には一緒になって遊びなどに参加したりしていた。こんなにも保護者の方々に参加して下さるとは思っていなかったため、とても驚いたが活動が終わり振り返ってみるとこれが花峰小のよさなのだと感じた。また、花峰小の先生方は休日にもかかわらず4名もの先生方がいらっしやり、運営やサポートをしてくださっていた。ある先生から「最近、家族で移住してきて自分も子供も初めてのことばかりで楽しい」というお話を伺った。教員として、このような学校で勤務することはスキルアップにも繋がるうえ、価値観の幅が広がるいい経験になる。そして子供にとっても自然の中で過ごす期間があることは非常に大切であると感じた。私も教員になったら離島で勤務してみたいと感じる瞬間であった。

また、防災ロゲイニング中に地域の方々とお会いしたが、皆さんあたたかく声をかけてくださった。このように、子供たちを学校だけでなく、保護者だけでなく、地域が一体となって全ての子供たちを気にかけて育てていっているからこそ子供たちも人見知りなどをあまりせずすぐに仲良くなれたのだと思う。このように、今回の活動を通して地域一体となった教育・学校を肌を通して感じることができた。今回、このような機会をいただけたのは花峰小の先生方や南種子町社会教育課の方々、大学の先生方のおかげである。ありがとうございました。来年、再来年もこのような活動を続け、自分自身だけでなく後輩たちにも経験して欲しいと思う。私も花峰小の先生方のような先生方になれるよう、まずは大学での勉強を惜しみなく続けて行きたいと思う。

私は、現在4年生で来年の春から小学校教員として働く。奄美実習のカリキュラムに惹かれて、鹿児島大学教育学部を志したため、コロナ禍で奄美実習が中止になり、離島に暮らす子どもたちとの交流ができなかったことが心残りであった。このアイランドキャンパス事業は、教員採用試験が終わり、すべての教育実習が終了したタイミングでの参加だった。鹿児島県を離れて教員になるため、離島の子どもたちと関わり、離島の生活に触れることができる最後の貴重な機会をいただけたと感じている。実際に南種子町を歩き、花峰小学校の子どもたち、先生方、保護者の方々に関わる中で学んだことを大きく3つの観点からまとめる。

はじめに子どもたちの素直さについてである。花峰小学校は全校児童10名の小規模校であり、大学生と関わる機会がほとんどないということを事前に聞いていた。また、人見知りをするかもしれないということも聞いていたため、どのように距離を詰めようか、どんな言葉をかけようかいろいろなことを考えていた。しかし、触れ合ってみると、とてもフレンドリーで素直で協力的な子どもたちだった。活動の中で、私たち大学生が止まってしまっても、協力してくれたり、待ってくれたりすることが何度もあり、子どもたちの素直さに助けられた。教育実習においても子どもたちの素直さに助けられ、授業は教師だけでなく、子どもたちと作っていくものだと学んできたが、花峰小学校の子どもたちと関わり、子どもの興味先導で教師が支えることの大切さを改めて学んだ。来春から関わる子どもたちがどんな子どもたちかはわからないが、素直さを大切に、教師が何でも指示をするのではなく、協力しながら生活していきたいと感じる。

次に先生方の協力についてである。花峰小学校の先生方は土曜日にも関わらず、活動に参加して下さり、離島での教員生活や子どもたちの様子について多くのことを教えてくださった。小規模校だからこそ、子どもと教師の距離感が近く、教師と子どもという関係性だけでなく、地域の大人と地域の子ども、親の知り合いとその子ども、のような関わりも見られると感じた。一人一人の学校外での様子までしっかり見とることができることが小規模校のよさだと実感した。子どもにとって家族以外で一番近い大人として、温かく、冷静な対応ができる教師の姿を学ぶことができた。

最後に保護者の方々の温かさについてである。当日は多くの保護者の方々が見に来て、一緒に活動に参加して下さり、学校のさまざまな行事には保護者の方々の協力が不可欠であることを実感した。来年からは、保護者の方々への感謝の気持ちや「一緒に」という気持ちを持ちながら関わっていききたいと思う。

多くの学びと来年からの期待を得ることができた機会になった。このような貴重な機会を作ってくくださった方々への感謝を忘れず、学びを来年からの教員生活に活かしていきたい。

今回花峰小学校との交流会に参加して特に学んだことは、地域で子どもを育てていくということである。

花峰小学校との交流を通して、地域と学校のつながりを強く感じた。今回の交流会では、子どもたちと保護者の方々だけでなく、地域の方も参加されていた。先生も含め、全員が親しい様子であったことが非常に印象的で、子どもの成長を見守る上で理想的な環境であると感じた。そのような環境で育った子どもたちは、非常に明るい子どもたちであった。花峰小学校の子どもたちの元気の良さは、この交流会で驚いたことの一つである。初めて会った私たちにも子どもたちは皆大きな声で挨拶をしてくれて、下中郷土カルタでは全力で楽しむ様子が印象的であった。一方で、自分たちで作ったカルタを発表してくれたときは、皆が大きな声で一息懸命発表する様子が見られた。楽しむ時は楽しみ、全力でするときは全力です、花峰小学校の子どもたちは単純にすごいと感じた。そのような子どもたちの明るさや元気の良さは、地域全体で見守りながら関わっているからこそ、育つものであるのだろうと思った。

下中郷土カルタで元気な子どもたちと同じくらい印象的であったのは、先生がカルタを何も見ずに読み上げていたことである。この学校ではそれだけ日常的にカルタをやっているのだろうと思ったと同時に、先生も地域の一員であることを強く感じた瞬間であった。子どもたちと一緒に楽しくんだり、子どもたちに地域について教えたりするためにも、教員として、赴任した学校の特色を学ぶことはもちろん、その地域の一員として地域の歴史や文化を学ぶことが重要であるのだと感じた。

防災ロゲイニングでは、2人の児童と一緒に班になり地域を回った。2人とも難しそうな場所でもあまり迷う様子もなく問題である写真の場所へ進んでいっていたため、どうしてすぐに分かるのか質問したところ、前に地域を回る学習活動をして学んだから覚えているとのことだった。それを聞いて、子どもたちは前に学習した事がきちんと定着しており、それを今回に生かしていることを感じ非常に感心した。これらの防災資源は何のためにあるのか考えながら活動したが、子どもたちは私たちも知らなかったことまで知っており、私自身も防災について非常に勉強になった。教員になった際には、子どもたちを守る立場になるため、その地域で起こりうる災害やとられている対策について、十分に知っておく必要があると感じることができた。

短い時間ではあったが、花峰小学校や下中地区の魅力を感じることができた半日となった。終始下中地域の温かさを感じ、子どもたちの笑顔に私も元気をもらった。素直で明るく、何事にも一生懸命な子どもたちを見て、将来担任をした際にはこのような子どもたちを育てていきたいと思った。そのためには、花峰小学校のように、地域全体で子供を見守り、大人も一緒になって全力で楽しむことが大切であることを学んだ。様々なことを感じ、学ぶことができたため、この交流会に参加できて本当に良かったと思う。

11月5日に南種子町の花峰小学校で防災ロゲイニングの活動をさせていただきました。私は中学校社会の免許取得を目指しているため、大学に入ってから教育活動の一環として小学生と触れ合う機会は今回が初めてでした。特に離島には排他的なイメージがあったため、現地の小学生と意思疎通を図りながら活動を進めていけるかという点で不安を抱いていました。しかし、活動の前日に小学校にご挨拶に伺った際、児童の皆さんのほうから積極的に話しかけていただき非常に驚いたのを覚えています。また、下級生が上級生のことを兄さん、姉さんと慕い、子どもたちのなかに兄弟のようなつながりを感じました。活動で私が担当したのは6年生と1年生のペアでしたが、2人ともお互いに自分の知っている情報を共有しあい活動に取り組むことができていました。このような異学年交流は人数の多い学校ではなかなか頻度を増やせないもので、少人数の学校ならではの取り組みやすさがあると思います。常に他学年を意識しながら学校生活を送ることで、上級生は下学年の子のフォローの仕方、下級生は自身が上級生となった時の立ち振る舞いなど、社会のなかで生きていく術を学ぶことができるはずで、少人数での異学年交流にメリットを感じたほか、花峰小学校の児童さんたちが大人になれている印象を受けたため、島外や学外の児童との交流ではどのような反応が見受けられるのか興味深く思いました。

また、活動内で強く印象に残ったのは児童、教師、保護者の方々の一体感です。今回の活動ではPTAから保護者の方々も多く参加してくださいました。保護者の方々が自分の子ども以外の児童さんのことも詳しく知っていて、普段から深い交流があるのだと感じました。地域との交流が日常的に行なわれていることで、地域学校間の情報共有や学外教育活動の円滑な実践に繋がりが、子どもたちの成長に効果的であると思います。

小学校での活動後に、広田遺跡で学芸員の方が種子島の歴史についてお話してくださいました。種子島には貝装飾や砂丘墓地、抜歯などの特有の文化が多くあるのにも関わらず、古代より開放的で外部との交流が盛んな島だったそうです。また、南種子町の各所にはポルトガル、イギリス、アメリカ商船など数々の漂着船の記念碑がたてられています。花峰小学校でもドラメルタン号漂着やインギー鳥の飼育などが行われており、島外との交流を記念碑や教育活動として残し、未来に受け継いでいこうという姿勢が見受けられました。古代からの歴史と、それらを次世代に繋ごうという意思が、現在の種子島の交流環境にも影響していると感じます。

離島ごとに特色はありますが、以上を鑑み、種子島は外部と交流する教育活動を行うのに素晴らしい島だと感じました。



## 2) おわりに

学生たちのレポートからも、本事業の目的は果たせたと考えている。防災ロゲイニングは、学校の敷地外で実施したが、活動中の安全面についてはどの学生もレポートで触れていない。これは、花峰小学校のPTA会長様並びに保護者の皆様が各チームに帯同して下さったため、安全面の配慮が徹底されていたためと思われる。また、花峰小学校の教職員様は、イベントの脇役に徹し、安全面への配慮に加えて、学生たちに対して快く接してくれていた。学生たちはとても良い話を聞くことができた喜んでおり、教員を目指す者にとって励みになったようである。突然のイベント開催の通知にも関わらず、協力して下さったことに感謝申し上げたい。

本事業の計画の提案から実施までの全てが滞りなく順調に進めることができたのは、花峰小学校の校長先生、教頭先生をはじめ、南種子町教育長先生、南種子町役場企画課並びに関係の職員様の多大なる協力のおかげである。重ねて感謝申し上げたい。